
王子様と罌に落ちた私

東城真雪

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

王子様と罌に落ちた私

【Nコード】

N9484T

【作者名】

東城真雪

【あらすじ】

自他共に認める地味女な私、倉田夏樹。

なぜか、かわいい友人とキレイな友人に囲まれ、ついたあだ名が地味派手。

そんな私が学園の王子様、上川卓也君に告白された！！？

これは一種のいじめだ――！！！！

この作品は、他サイトさまで短編連作として投稿していたものです。そのため、こちらでも短編連作の形となります。

王子様と私

私、倉田夏樹は16歳のぴっちぴちな乙女。……とはいえないかな？

だって私は自他共に認める地味女。

今まで染めたこともパーマをかけたこともない髪は真つ黒でおも
ーく、さらに黒縁眼鏡をかけているから、見るからに地味。

陰で地味女と呼ばれているのも知っている。全然気にしたこと
ないし、おしゃれなんて面倒だからどうでもいいけど。

でも、高校2年生になって新しいクラスになった今、なぜかあだ
名は『地味派手』になったみたい。

その原因は、今共にお昼を食べているこの友人たちだ。

私の左に座るかわいい彼女の名前は、佐藤愛美ちゃん。ギャグじ
やないけど、ほんとに砂糖菓子のようにふわふわした子。いつもに
こにこしている彼女には癒される。

そして私の右に座るキレイな彼女の名前は、皆川静香。これもま
た極上の美人で、ふっと流し目をされれば何人もの人間が倒れてし
まうというほどの。

なぜこんな派手な人たちが私と友達をしているのか……それは私
も知りたいよ。

彼女たちいわく、私の周囲には何かおもしろそうなオーラが漂っているそうだ。

周りをつるまず、かといっていじめられているわけでもなく、本人も1人でせいせいしているような雰囲気には惹かれたんだって……。

器がきれいなこの人達は、中身もきれいらしい。人を見た目で判断せず、きちんと中身を見てくれるなんて、本当にいい人たちだ。

まあ、このような次第で、私のあだ人には地味に（友人が）派手というものがついたわけで。

なんのひねりもないこのあだ名を考えた人のボキャブラリーは貧困だ……なんてそつちを考える私はやっぱり変わり者なのかな？？

私の高校生活は、なにやら2年生になったときに急に派手なものになってしまった。

……が、

これはまだまだ序章だということに私は気づいていなかった。

「あゝ、愛美の作る卵焼きはほんと絶品だー！！」

なんてのんきにご飯を食べている場合じゃなかったのを知るのは後のこと。

私はその日、日直だった。

愛美と静香はそれぞれ料理部、オーケストラ部の部長をしているから、授業が終わったらすぐに部活へと向かった。

「ばいばい、二人とも」

「夏樹ちゃん、日直がんばってね！」

「また明日ね、夏樹」

と二人を見送り、まだクラスの大半が残った教室で、5時間目の数学の黒板を消そうとしたその時。

教室に誰かが入ってきた。

別に気にも留めずに黒板を消していた私のところへ、足音は近づいてくる。

もしかして、愛美か静香のどちらかが忘れ物でも取りに来たのかな？

そう思い、足音のほうへ顔を向けたとき。

そこにいたのは、にっこりと秀麗な笑みを浮かべた学園の王子様こと、上川卓也君その人だった。

私の頭の上には、？マークが浮かんでいたと思う。

だって、上川君とは同じクラスになったこともなければ、話した

こともない。

なのに明らかに私に視線を合わせて立っている彼。

というか、背の高い彼に見下ろされている私。

な……なぜに??

上川卓也君という人は、すごい人だ。なにがすごいかっていうと、顔よし、頭よし、運動神経よし……。

というように、なんでもできる王子様のような人なのだ。ほんと、かわいげがないよね。

髪は染めているわけでもないのに茶色がかって、さらさらとしている。同じ高校生かといいたいくらい、そのへんの男子とは違う。

そんな人だから、密かに『上川親衛隊』なるものも存在するらしく、上川君に必要以上にかまうとその鉄槌が下されるらしい……。

こ、こわー！ー！！

そんな彼が私になんの用だろう……？

どうやらクラス中の人間がそう思っていたようで、気づけば皆が私と上川君をじーっと見ていた。

うつ…なんかいごごち悪い……。目立つの嫌いなのに。

そう思っていたたまれなくなってきたとき、

「倉田さん」

ようやく上川君のきれいな唇から言葉が紡がれた。

「は……はいな？」

てんぱっていたせいか、ちょっと変な返事になってしまった。

それに対してなのか何なのか、ふっと笑った上川君が

「――？」

なにかを言った。

でも、上川君のきれいな笑顔に見とれていた私は聞いてなかった。

だってほんとにきれいだったんだ！！きれいなアーモンド形の瞳が細くなって、笑ったときにできる目じりのしわも、何もかも！！

自分の外見は気にならなくても、きれいなものを愛でるのは人間の性でしょ！！

「倉田さん？いい？」

私に、再び話しかける上川君。

やばっ……。全然話聞いてなかった。

「あはは」

と乾いた笑いでごまかす私に、上川君がにやつと口の端をあげたのは気のせいかしら？

「それは了承ってことでいいのかな？」

なにやら念を押してくる上川君。

あつ、もしかして何か頼みごととしてきたのか！！ならこれを断るわけにはいかないよね。なにせ、学園の王子の頼みごとなんだから。

だから、私はなんにも考えず言ってしまった。

「うん」

愛美と静香いわく、学校中に響いたという叫びを、私は発していた。

そして、今。なぜかにこにこと笑う上川君とお昼を食べている私。

あれから、断固抗議したのだったが、

「一度言ったことを翻すの？」だとか、

「きつとそんなことしたら親衛隊の人たちが何か……」だとか、

「僕が学校来なくなったら倉田さんのせいだな。」だとか……。

本当にこれはあの学園の王子様、上川卓也か？

といたいほど、嬉しげに私をおいつめてくる彼に、私はついにその膝を屈することになった。

それ以来、いつも一緒にお昼を食べることに。

ちなみに、愛美と静香は遠慮して少し遠巻きに食べている。そしてなぜか同情の目。

「ほら、夏樹ちゃん、あーん」

私は、この人と本当に付き合っているのだろうか……。

嬉しそつに私に卵焼きを差し出してくるこの男、こんな風に甘い顔をしているが、これを拒否しようものなら、さまざまな言葉を使って私を脅してくる。

「あ……あゝん」

そうして口に広がる甘い卵焼きとの味は、周りから『きゃゝっ』と聞こえてくる悲鳴で、しょっぱいものに感じた。

私は、どうやら上川卓也の罠にはまってしまったらしい。

後日彼から聞きだしたことだが。（ちなみに、デートの約束をさせられた）

私のことを向こうはずいぶん前から知っていたらしい。

というのも、私が通う塾の講師が、彼のお兄さんだったらしく、いつも私の話を聞いていたのだとか。

きつとろくでもない話だろうになぜ告白に至ったのか、未だに謎。

そして、クラスの皆の前で告白することで断れないように持ち込むつもりだったらしい。

（そんなことしなくても、ぼーっとしてしまい、簡単にOKしてしまったが……）

今のところ親衛隊の皆さんから鉄槌は下っていない。

愛美と静香は、上川君がきつちり釘をさしたらしいよと言つていた。

だが。

「ほら、卓也って呼んで？」

と、何人もの人間が興味深々で見ると、私に強要してくる彼。

私が目立つのが嫌いなものを知っていてやっているのは明らか。

だって、口元がにやりと笑っている。

誰が想像できただろう？このきれいな形をした人間の中身が黒色だったなんて。

私は、私を羨ましが
る皆さんに
声を大にして
言いたい。

「これは、一種のい・じ・め・だ――――！！！」

また彼はにやりと笑うのだろっけド。

友人のつぶやき

学園の王子こと、上川卓也からの衝撃的な告白から数日たったあの日のこと。

夏樹と上川がじゃれあっている（ように見える）のを遠巻きに眺めながら、愛美と静香はのんびり昼食をとっていた。

「でも上川くんの行動力にはホント感心するわ」

むしゃむしゃと、その細いからだのどこに入るのかというほどの量のサンドイッチを食べながら、静香が呟く。

「ほんとにね」。上川くんが夏樹ちゃんを意識してる（狩ろうとしている）、のは気づいていたけど……思ってたより動くの早かったね」

あつ、夏樹ちゃんがあつんに応じた！などと言いながらきゅっきゅっと笑う愛美は、今度は表情を一変させてため息を吐いた。

「でも、夏樹ちゃん大変だね……」

それに応ずるように静香もため息をつく。

「うん。相手があの上川くんじゃあね……。夏樹は気づいているのか分からないけど、ありゃ結構腹黒だよ」

「ふう……夏樹ちゃん、常に冷静に見えて案外ぼけてるからな。そこがかわいいんだけど」

こんなことを友人に言われているとは思ってもよらない夏樹は、あ
いかわらずお弁当を食べさせてもらっている。

「ていうかさ、夏樹って上川くんのこと好きなのか？」

「そこだよね。今の状態は明らかに……」

「「流されてる」」

静香は思い返した。

夏樹と出会ったのは、高校の2年生になってからだ。

夏樹は、今まで自分が見たことのないような地味な外見をして
いた。正直、ここまでくれば逆にわざらしくない？とも思えるよう
な『地味』を絵に描いたような姿に、興味をもったのが始まりだ。

声をかけてみれば、特段おどおどするわけでもなく（静香はその
容姿からか、同年代の少年少女からはおびえられる傾向にあった）、

地味な外見も本当にその無精からできた産物であることが分かり、その一風変わった思考から、一緒にいるのもどんどん楽しくなっていた。

そして、夏樹は、常々静香と愛美が外見にこだわらず自分を受け入れてくれたことに感謝してくれていたが、夏樹もまた、静香を外見で判断することなく、ありのままの静香を受け入れてくれた（静香はその外見に反し、やることなすことがおやじくさいため、大半の人間がそのギャップに引く傾向にあった）。

そうすると、夏樹の側は大変居心地が良いものであった。

しかし、現在。

夏樹の隣という positioning は上川に侵略されつつある。

（どう見ても上川くんが夏樹をいのように操っているのよね。夏樹いじりは私の専売特許だったのに……こうなったら徹底的に邪魔をしてやるつかしら）

そんなことを考えながら、くふふと笑いつつ夏樹を見ている静香の隣で、愛美もまた考えていた。

夏樹と出会ったのは、静香と同じく、高校の2年にあがってからだった。

愛美は最初から夏樹に近づいたわけではなかった。気づけば、学年……いや、学校で一番の（残念な）美女と仲良くなっていた夏樹。

その異色の取り合わせは、周りの人間もちろんであったが、愛美の好奇心も派手にくすぐった。

そうして近づいてみれば、なるほど。夏樹はまず外見で人を判断することがない。おそらく、自分も外見をまったく気にしていないためだろう。

すると、自らもすこし腹黒いかな？なんて思っていた自分の性格を小出しにしても、全くそれに動ずることなく（いや、もしかしたら気づいていないのかもしれない）、今まで周りにいた人間とは違い、そのギャップから引くこともなかった。

これが静香を引きつけた理由か、と納得し、気づけばいつも3人でいるようになった。

それが現在。

（上川くんにいいように遊ばれて、ちうっとも私にかまってくれないのよね）。上川君に遊ばれてわたわたりしている夏樹ちゃんもかわいけれど、やっぱり自分で夏樹ちゃんをいじる方が何倍も楽しい……邪魔しちやおうかなっ（ふふ）

ふふふと不気味に笑うこの友人たちを、夏樹は外見が美しく、中身も美しい友人だと信じていた。つまり、その鈍感さゆえに、愛美の予測通り、夏樹は彼女らのギャップとやらにあまり気づいていなかったのである。

愛美が毒を吐いても、その愛らしさ故、きらきら補正をかける夏樹。愛美ちゃんって結構はつきり物を言うよね、ということになる。

静香がおやじよろしく、雑な行動をとつても、きらきら補正をかける夏樹。静香って、さばさばしてるよね、ということになる。

もちろん、彼女らの信じているように、夏樹は外見でその人となりを判断することではなく、きちんと愛美と静香のありのままを受け入れてはいたが、人より数倍きれいなもの、可愛らしいものを愛する傾向にあるのも事実であつたため、彼女の頭の中では常にきらきら補正がかかってしまっていたのだ。

愛美と静香が不気味な笑みを浮かべていたちようどそのとき、夏樹は何とか上川くんに『あゝん』攻撃をやめてもらうことに成功していた。

しかし、急に背中を悪寒が走つた。

「どつしたの？」

急に自分の体を抱きしめた夏樹を不思議そうにみる上川くんに、へらつと笑い返しながら夏樹は首をかしげた。

（気のせいかな？ 今もんのすごい邪悪な気を感じただけど……）

キョロキョロと周りを見回しても、自分を睨んでいるような人（

上川親衛隊）は見当たらないし、友人たちにはっこりこちらを見て手まで振ってくれている。

（やっぱ気のせいかな！ よく考えてみれば気を感じるってあたしは仙人かなんかった）

などと自分で自分につっこみを入れつつ、そして友人たちの笑みの意味に気づかないまま、夏樹は再びお弁当を食べはじめた。

自分が、結局似たような人種に気に入られていることにきづくことのないまま……。

アーメン。

「はくしょんっ！ うゝ、誰か噂してるのかな……？」

「夏樹ちゃん、寒いのか？ それなら暖めてあげようか？」

「えええ、遠慮します！」

「……ちっ」

（今！ 今絶対舌打ちしたっ！）

「ん？ どうしたの、夏樹ちゃん」

「……いえ、ナンデモナイデス（く、黒いオーラが……っ）」

こうして夏樹の生活はより波乱に満ちたものへと変貌しつつあるの
であった。（大げさ）

クラスメイトのつぶやき

俺のクラスは、他のクラスとは比べものにならないくらい派手だ。その原因は、学校の人気を二分する女子だ。

一人は佐藤愛美。砂糖菓子のようにふわふわした子で、主に下級生に人気がある。たまに毒舌をはくため、そのギャップで引く奴もいるみたいだが、その人気の高さは衰えることを知らない。

そしてもう一人は、皆川静香。こちらは極上な美人で、主に上級生に人気がある。こちらにもたまに見せるおやじくささで引く奴もいたが、それを吹き飛ばして余りあるほどの人気の高さだ。

そんな彼女達は自らの容姿を鼻にかけることもなく、また、男子の前でだけ態度を変えろということもなかったため、女子にも人気があった。

だからか、俺のクラスは他のクラスに比べて団結力があるというと思う。

まあ、変わった奴が集められたというのも理由の一つかもしれない。基本的におもしろけりやなんでもいいというスタンスの奴ばかりなのだ。

そんな中、彼女達とは別の意味で目立つ女子がいた。

その名は倉田夏樹。

外見はいたって地味。今どきスカートの丈もいじらず、真っ黒の

髪でいれば、派手な奴が多いこの学校で逆に目立つのは当たり前だった。

だけど、倉田が目立つのは、それだけじゃない。

その脇をあの佐藤と皆川が固めているからだ。

クラスの奴らもそれで倉田に注目しはじめたんじゃないかな。

だけど、俺はずっと前から彼女を見ていた。確かに一見地味だが、それは飾ってないからであって結構かわいいことも知っている。

ちよっと思惑回路がずれていて、天然だということも。

誰も彼女を気に留めない中、俺だけは見ていた。いつからかは分からないけど、やたら視界に入る彼女を、いつの間にか好きになっていた。

気づけば彼女の姿を目で追っていたし、その姿が見えなければ探すことまでしていた。ちょこまかと動き回るその姿は密かに俺の癒しとなっていた。

だからクラスが同じになれた今、ようやくクラスメイトとして自分を認識してもらえ、思い切って気持ち伝えようと思っていたのに。

彼女を見ているのは俺だけじゃなかったことに気づいたときには、遅かった。そいつの名は上川卓也。

この学園で王子と呼ばれる、全てにおいて完璧な男。

奴はよりにもよって、クラスメイトの前で倉田を手に入れた。うちのクラスの習性上、二人をおもしろがって応援するに決まっていたし、上川もそれを狙っていたに違いない。

そして、告白の時、俺をちらつと見たのは気のせいではないと思う。

くそっ！上川は王子なんかじゃねえ、悪魔だ！

あの告白のときから、上川は倉田にべったりだ。あれは倉田をじわりと囲いに覆うとともに、周りへの牽制だと思う。

だが、それがかえって倉田の真の価値に気づかせることになるなんて、奴には計算外だったに違いない。

興味本位にしろ何にしろ、周りの人間は、佐藤と皆川の付属品としてではなく、倉田自身を見るようになってしまった。

特に男は、自分よりレベルの高い男が選んだ女として倉田を見ている。

そうして見ていれば、佐藤と皆川が倉田を可愛がり、そして上川が愛でる理由が自ずと分かってくる。

小動物的で以外と可愛くて、そして変な方向へ向いた思考。徐々に倉田が異性として周りの男どもに見られるようになっていって、見ていればすぐに分かる。

ざまあみろ！

いやっ、でも、くそっ！結局俺にとってもライバルが増えるだけじゃねえか！

上川のあほんだらっ！

おぼえとけ、絶対倉田を上川から救い出してみせる！

ある日、学園に一つの噂がはしった。

曰く、

「なんか、高梨君が、あの倉田さんを狙っているらしいよ！」

「まさかっ！だって、王子ほどじゃないけど、結構かつこいいじやん！高梨くん」

「それがさ、屋上で倉田さんを救いだすとかなんとか叫んでたらしいよ」

「あゝ……ありえるかも。高梨くんて、真面目で熱い奴だからね。普通なら恥ずかしくってそんなことできないけどねー」

「でしょでしょ？」

「なーんかおもしろくなりそ〜」

夏樹と高梨のクラスメイト。つまり、高梨のいうところの、おもしろけりやなんでもいいスタンスの人間達が、また新しいネタが増えたと喜んだのは、言うまでもない。

そしてそれは、あつという間に上川の耳にも入ることとなる。

「卓也君、なんか機嫌悪そうだけど、どうかした？」

ここ最近、夏樹は卓也と帰路を共にするようになっていた。こうして徐々にならされていくのかと思うと、ちよつと怖いなと夏樹は思っている。

「んー、そう見える？」

そういつてにつこりとこちらを向く卓也は、一見穏やかそうな笑みを浮かべているが、夏樹からすればその背中に般若の面を背負っているようにしか見えない。

「ん……まあ」

「そっか、うれしいよ」

「……は？」

夏樹には今の会話の流れが全く理解できなかった。不機嫌そうと指摘されたことが嬉しいのか？なにが？

「いやだつてさ。今の僕が不機嫌そうにみえるってことは、夏樹が僕のことをよく理解してるからってことだから」

……たしかに、卓也はその笑みに全ての感情を隠してしまうため、少し前の自分だったら、その表情から現在の機嫌を読み解くのはできなかったかもしれない。

（つていうか、いつのまにか夏樹って呼び捨てだしね！）

「これからももっと僕のこと知ってくれたらいいからね」

そういつて笑う卓也は、先ほどより気分が上昇したらしい。本当に楽しそうに笑って夏樹の手をとってくる。

正直に言えば、夏樹は卓也が自分に向けてくれている感情と同等のものを卓也に対して抱いているわけではない。

けれど、なんだかんだで毎日卓也と接するうちに、卓也というところが自然になってきているのも確かだ。

こんなのもありかなあと思いつている状態だ。

そして、それこそが卓也の目論見であることにも薄々気づきつつ、それに身を委ねている自分は、結局卓也に好意を抱いているということなのだろう。

まだ、胸がときどきしたりといった恋特有の症状は出ていない（たまに見せられる黒い笑みに違う意味でときどきすることはあるが）。

けれど、着実に、自分はそっちに進んでいるような気がする。

右手をやさしく握る卓也の手を、失いたくないと思ったある夏の
日。夏樹は、自らをめぐる状況がかわりつつあることを知らないま
ま、ただのんびりと卓也と共に歩くことを楽しんでいた。

初デートは波乱の予感？ その1

「………終わったー！！！！」

全校生徒が、ためにために終了宣言をしたのは、わたくし倉田夏樹あすまのじゅんじゅが通う高校、東野高校の1学期期末試験だ。

正直上川くんとのもにやむにやがあつたため、試験勉強どころではなかったけど……顔に似合わず……といったらかなり失礼か……愛美がこつこつ勉強するタイプで成績もよかったから、試験前にお世話になってなんとか乗り切ることができた。

静香なんかは特に勉強せずともそれなりの成績がとれるタイプだから、本当にうらやましい。

「愛美！ほんつとにありがとう！ 恩に着ます！」

「やだな！夏樹ちゃんってばお・お・げ・さ！ 私は自分の復習に夏樹ちゃんを使ったただだよ！」

なんてことを言っているが、試験前はつきつきりで勉強を見てくれたのだから、本当に頭が上がらない。

「でも！もしそんなに恩を感じてくれているんなら、一つお願いしてもいい？」

綿菓子のような愛美に首をかしげつつこんなことを言われたら、お願いを聞かない人間がいるだろうか？ いや、いない。

「もちろんだよ！ 出来ることならなんでもするから、なんでも

言ってる？」

「えゝ本当に？」なんて言いながら嬉しそうに笑う愛美が発した次の言葉に、私は凍らされることとなる。

「じゃあ、上川君と別れて？」

一瞬自分の脳みそが停止したのが分かった。思わぬ所からのジャブもいいとこ、完全に予想を裏切る斜め43度くらいのところからの攻撃。え？別れて？最近は試験前と言うこともあって、あんまりかまってこなかった卓也だったけど、それでも別れようとはいわれていないから、今も私たちはつきあっているわけで……。え？別れて？もしかして愛美は上川君のことが好きだったのだろうか？だからこれを機に私たちを別れさせよう？だけど、それじゃあ今まで一言もなかったのは解せない。愛美だったら、好きだということはいくら付き合いだしたとしても言ってきたきそうなものなのに。え？ていうか、私めちやくちゃ動揺してる？な、なんかそれに自分が一番意外。

「つぶつぶ」

え？つぶつぶってなにその古典的笑いは。え？てか、なに愛美そんなにふるふるしてるの？

「あゝははははっ！ やだゝ夏樹ちゃんてばっ、動揺しすぎだからゝ！」

「ほへっ？」

「ほへってなんだ、ほへって！ ちょっと顔みればすぐ分かるでしょーが、愛美がからかってるってことくらい」

横からの静香のつつこみを受けても、未だ現状把握ができない。

「か、からかつてる？」

「そ！ 夏樹ちゃんがどれくらい上川君のこと好きなのかな〜って思ってたから、ちよつとからかつちゃった！ ごめんね？」

か、からかつてたのか。ちよつとほつとした。

「ふふ、今、ほつとしたでしょ？ 夏樹ちゃんてば、結構上川君のこと好きなんだ？」

今度は、その質問に動揺する。す、好き？ いや、確かに嫌いじゃないけど……好きかと言われたらまだ違うよーな！。その眩きが周りにも聞こえていたようで、それに対する返答があった。

「……ふ〜ん。夏樹は僕のこと好きじゃないんだ」

いや、だから好きじゃないというわけでもなく。

「じゃあ、好きなの？」

ん〜。

「そこで即答してくれないなんて、酷いね、夏樹」

……ちよ、ちよつと待て。今私だれと喋ってるわけ？ なんか冷や汗が尋常じゃないくらい出てきたんだけど。

こわい、こわいけど……勇気をだして振り向いた先には、幽鬼のような顔をした卓也がいた。こ、言葉遊びなんかしてないんだから

ねっ！

「夏樹、僕傷ついたな」

ぱつとみは、ほんとにしょんぼりしている美少年に見える。けど、その実般若のごとくおいかりなのが空気から分かる。いやっ、分かるようになってる自分がいやっ！

「これは、傷つけた夏樹自身に慰めてもらわないと……ね？」

優しいな微笑みをこちらに向けてくる卓也の額に青筋がたっているのに、いったい何人気づけるだろうか……。

お怒りの卓也にぶるぶると震える私の後ろで、愛美と静香が目を見合わせてにんまりしたのにも、私を含め、いったい誰が気づけただろうか……。

「ねえ、上川君、おとりこみのところ悪いけど、愛美にいい考えがあります！」

その緊迫した（ように感じているのは確実に私だけなんだけど）空気もなんのその、いつものふわふわした声で愛美がはいつと手を挙げて卓也に話しかける。

「おとりこみね、佐藤さん、絶対僕が来るの計算してたでしょ？」
「なんのことか愛美わかんない。でね、いい考えというのは、上川君と夏樹ちゃんがデートしたらいいと思います！」

なにやら計算だとか怪しげな言葉も出てきたけど、ちゃんと聞いているのかいないのか、愛美は驚くべきスルースキルを用いて自分

の話を押し通してくる。正直、卓也相手にこんなことをできるなんて、羨ましい。だけど、なんか、耳なじみのない言葉が出てきたんですけど……。

「で、デート？」

「そ、夏樹ちゃん。で・え・と！」

再びかきーんと凍った私のことは完全に無視で、卓也が一人話を進める。

「ふーん。で？何か具体的なプランがあるわけ？」

「それは、私が。実は、ここに遊園地のチケットが4枚あります。本当は私と愛美と夏樹の3人で行こうと思っていたけど、チケットも余ってるし、上川と夏樹の仲直りのために私たちが一肌脱ぎまして、特別に上川も連れて行ってあげることになりましたと思います」

「遊園地ねー。僕はできれば夏樹と2人がいいけど」

「はい却下ー！ 夏樹には最初のデートから二人きりなんて絶対無理です！」

「まあ、それもそうか」

「んじゃ、いつにする？」

「やっぱり補習が始まるまえじゃないかな？」

「じゃー明後日とか……」

わたくしを完全に無視して始まった私と卓也のデート？のプランを練る会に全くついていけないんですけど。ていうか、なに、デートって……

「デートー……！！？」

「あ、やっとこっちの世界に戻ってきた。ていうか、うるさい」

し、静香さん……。ひどいっ……。

「夏樹、楽しみだね、僕たちの初デート」

うちひしがれる私なんておかまいなしに、卓也が話しかけてくる。

「ちょ、ちょっと待って！　なんでそんなことに！」

そう聞くと、卓也はそれはそれはきれいな笑顔でほえんだ。最近じゃあ、その笑顔は煙幕みたいなものだと思いついたけど。大抵この笑顔をした卓也の思い通りにならないことはない。みんな煙にまかれて気づけば思い通りに動かされているから。

「それはもちろん、僕の傷ついた心を夏樹がデートで癒すためですよ？」

たしかに、付き合っている相手にとって、自分のことを好きか分からないというような話は気持ちよくなかったらうと分かるだけあって、それ以上にもいえない。

「楽しみだね？」

「う……うふふふふふ」

これはもう、笑うことしかできないな。その様子を見て愛美と静香が何かたくらんでいるようににんまりしたのにも気づかなかったし、密かに聞き耳をたてている男子生徒がいることにも、もちろん気づかなかった。

初デート。その響きは甘いはずなのに、なぜこんなにほろ苦い気持ちになるんだろう。とほほ。

初デートは波乱の予感？ その2

と、いうわけで。全く私を無視して決定された卓也との初デートの日。

待ち合わせはお昼前で、お昼は遊園地で食べるんだって。これも事後通知だったけど。事後承諾ですらなかったよ。

とりあえず何を着ていったらいいのか全くわからない。生まれてこの方、面倒くさいという理由のみで外見を飾ることを放棄してきた私は、休みの日に愛美や静香と遊ぶ場合も、制服で押し通してきた。結構多いんだよ？制服で遊ぶ子。まあもちろん、その子達は可愛く制服を着こなして、高校生という一種のブランドを背負っている子達だけども。

あーだんだん面倒くさくなってきた。さすがに遊園地に制服はいかんよね。

……仮病つかっちゃおうかな。

そのときだった。

——ピリリリ・ピリリリ

私の携帯が突然鳴り出した。いや、携帯が鳴るのはいつも突然なんだけども。

メールの差出人は……卓也。登録名も『卓也』です。もちろん、登録したのは卓也。彼氏なんだから呼び捨てで登録してよねと、よ

くわかるようなわからないような理由で勝手に登録されました。

おそろおそろメールを開いてみると……『夏樹。服を考えるのが面倒くさくなっただからって仮病つかって休まないようにね。』……。

こわいつこわすぎるよ!!めちやくちや的確に心を読まれてる。

このタイミングといい、卓也は王子様じゃなくて魔王様な気がする。背筋にぞぞつと悪寒がはしたので、とりあえず仮病はやめた。となると、やっぱりここは兄ちゃんに相談するしかないか。

私には一人兄ちゃんがいる。私とは違って外見にも気を遣うタイプなので、美形ではないけどそこそこモテる。と、本人は言う。

隣の部屋の扉をノックし、「にいちやくん?」と呼びかければ、そこにはベッドに寝転がり、漫画を読んでいる兄ちゃんこと、倉田^{くらた}
^{はるみ}春海、20歳。大学3年生だ。

「どうしたんだ?夏樹。お前から俺の部屋に来るなんて珍しいな」

そついいながら起き上がった兄ちゃんは、部屋の中でもこぎれいな格好をしていて、髪も短くさっぱりとしている。まあ、一見さわやかに見えなくてもない。

「いや……ちょっと相談が」

「相談?なんだよ本当に珍しいな」

「んゝ遊園地に行くのになに来ていったらいい?」

「……」

いや、そこで目を見開いてフリーズしないで!こっちは恥ずかし

いのこらえて聞いているんだから。

「……友達といくのか？」

「ん……まあ、そうだね」

愛美と静香も行くんだから、嘘はいつてない。

「……その中に男もいるのか？」

「……まあ」

するどいな、兄ちゃん。私のその返事を聞いた兄ちゃんは、腕を組んでなにやら考え込んでいた。いや、何をそんなに考えることがある？とりあえず服考えてよ！そんなに時間に余裕があるわけでもないんだからさ！

「それさ、俺も行っている？」

「……はっ！？」

「いやだつてさ、俺今日暇なんだもん」

「暇なんだもんって……嫌だよ！どこに兄貴連れで遊びに行く女子高生がいるのさっ！」

「あゝわかった、じゃあ、俊樹もさそって後ろからこっそりついて行くわ」

「いや、なに勝手に決定して……って、こらこらどこに電話してるっ！」

「あ、もしもし？俊樹？俺俺。あ？詐欺じゃねーよ。お前、今日暇だろ？あ？嘘こけ。お前今ベッドに寝転がって漫画読んでただろ。何で分かるかって？そんなもん俺もだからだよ！つつゝわけで、おまえ今日俺と遊園地な。いやいや、野郎だけってな、今日妹も遊園地行くんだよ。知ってるだろ？妹の友達。……そうそう、あの子らも来るみたいだからさ、せっかく暇にしてるんだから行こう

や。……おう。じゃ、そういうことでっ！」

「ちょーい！ なに人の友達だしにしてんだっ！ えっていうか、もうついてくるの決定なわけ？」

「おう！ お前も人に服のコーディネート頼むんだ、文句ないよな？」

疑問系だけど、もはや疑問じゃない圧力が……。文句言うんじゃねーよって聞こえるよ、兄ちゃん。

あーなんでこうなるのか。

「んじゃ、とりあえず、お前の数少ない服じゃあ物足りないから、母ちゃんの服見てくるわ」

うちの母ちゃんは、未だに若い頃のスタイルを維持してるから、私もちょうど着れるサイズだけど……母ちゃんが好む服と言ったらわりと可愛い系だからな、なんか嫌な予感がするな……。もうどうにでもなれってか。あはは。

待ち合わせ場所、遊園地の前にて。

一方では、少し早めにきて待っていた愛美、静香、卓也の三人。そしてもう一方では、時間ぎりぎりに来た私、兄ちゃん、兄ちゃんの大学の友達桜田俊樹^{さくらだとしき}。

なぜこのメンバー。

「夏樹、その人たち……だれ？」

愛美と静香は私の家に遊びに来たときにかち合ったことがあるから、兄ちゃんも俊樹君も知ってるけど、卓也はもちろん知らない。だから、その疑問は普通のことなんだけど。

あれ？なんか般若がみえるよ？愛美たちもいるから、人が増えても気にならないかと思っただけど、やっぱりだめだった？

「あの、この人は……」

「こんにちは、俺の夏樹がいつもお世話になってます」

ちよつと兄ちゃん！人の言葉に勝手にかぶせないでよね！と言う意味を込めて兄ちゃんを睨むが、我が家の大魔王はまったく素知らぬ顔。そして、そろつと卓也を見ると……ひーっ！体からなんか黒いものがでてるー！！！！

「俺の？それは違いますね、僕の、夏樹です」

「いやいや、お前夏樹と一緒に寝たことや風呂に入ったこともないだろ？」

ちよちよちよつ！なにそんな昔の話を出してるの！てかつ、だんだん兄ちゃんの魂胆見えてきた！やめてっ！卓也で遊ぶのやめてっ！確実に私に火の粉がふりかかるからっ！

「なっつゝきっ？」

ほらっ！卓也がめちゃくちゃいい笑顔でこっち見てるんですけど！

「……ぶ。まーまーちよつと落ち着きな、少年。俺は、夏樹のあ・に・き。ね？ だから安心しなつて。このコーディネートだって俺プロデュースだよ？ 感謝しな？」

「……なるほど、夏樹のお兄さんでしたか。ですが、夏樹と一緒に寝ただの風呂にはいったあの記憶は抹消していただけだと嬉しいです。あと、夏樹、今日はいつもにもまして可愛いね。そのワンピース、似合ってるよ？」

兄貴とわかってても牽制する卓也に、なんだか最初から疲れてきた。ううう。しかもワンピースとか着たの、小さい頃ぶりなんだけど。レギンスはいてるから楽ちゃんは楽ちゃんだけど、制服とはちがつて私服でスカートはくのがなんか気恥ずかしい。兄ちゃんも母ちゃんの服の中からそれなりに落ち着いたやつを選んでくれたから、思ったよりは着るのに抵抗なかったけど。

その上、髪の毛とかまでいじられて、普段運動するときかしな接触までいれられてるから、たぶん普段とは全然ちがうと思う。普通の女子くらいにはなれてるんじゃないかな。

「あ……アリガトウゴザイマス」

「ほんとー！ 夏樹ちゃん、すごい可愛いよ！」

「うんうん。なんか、もったいないな。普段から接触にすればいいのに」

「えー、だって接触はやっぱ目が乾いたりするし、むやみに寝れないから面倒なんだもん」

「あはは！ 夏樹ちゃんらしい」

そんな感じで女子で盛り上がっていたら、気づけばなにやら兄ちゃんと俊樹君と卓也で話し込んでいるではないか！ちよつとまてー！ーい！いつのまにそんなに仲良く？

やっぱり魔王同士とその下僕（俊樹君のこと。「ごめんね？えへ？」）だから仲良くなりやすいのか？

でも、なんでだろう。私の気のせいかな？嫌な予感しかないんだけど。

「さ、夏樹、遊園地に入ろうか」

密談はすんだようで、いつもの爽やかな笑顔で卓也が私の手をとってくる。

「え……う、うん」

そして、いつものように流される私。後ろをちらつとみれば、ちゃんと愛美、俊樹君と静香のペアで、いつのまにかできあがっている。愛美と静香も若干惑っているけど、そこはやはり年上、さりたエスコートしている。

あれ、なんかもしかしてだけど……兄ちゃん、ここまで計算してた？わからないよね？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9484t/>

王子様と罌に落ちた私

2011年8月20日14時30分発行